

**精神世界再考：新潮流としての「霊性にかんする  
協働組織」の研究を中心に [論文要旨及び審査の  
要旨]**

著者	伊藤 耕一郎
発行年	2021-09-20
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第842号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00025740">http://hdl.handle.net/10112/00025740</a>

[1]

氏名	いとう こういちろう 伊藤 耕一郎
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第274号
学位授与の日付	2021年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	精神世界再考 —新潮流としての「霊性にかんする協働組織」の 研究を中心に—
論文審査委員	主査教授 宮本 要太郎 副査 准教授 水野 友晴 副査教授 市川 秀之（滋賀県立大学）

## 論文内容の要旨

本論文は、スピリチュアリティの原点といえる精神世界について、先行研究において十分に明らかにされていない側面を実証的に論じたものである。

2000年代に入り、スピリチュアリティについては、「ツーリズム」、「マーケット」、「ケア」などさまざまな方面から論じられているが、必ずしもその実態が総合的かつ実証的に明確になっているわけではない。そこで本研究では、質的研究（聞き取り・現地調査など）と量的研究（アンケート調査など）を併用し、そこから得られたデータを分析して、先行研究においてこれまで実証的な研究手法によって必ずしも十分に検証されてこなかった部分を明らかにすることを試みている。

先行研究に対して本研究が修正を迫るのは、主に次の2点であるといえる。1点目は、先行研究では概して「精神世界と新新宗教には親和性がある」とされてきたが、それほど親和性が見出せず、むしろ伝統的宗教との親和性の方が目立つことである。また、2点目は、「奉仕による共同という理念を尊ばない」と見なされてきた精神世界関係者が、共通の目的のもとに集い、そこから多様な組織が成立してきていることである。

論文構成は以下の通りである。

序章

第1章 日本の霊性思想史

第2章 精神世界とは何か

第3章 精神世界と宗教

#### 第4章 精神世界とその周辺

#### 第5章 精神世界の新潮流——霊性にかんする協働組織

序章では、精神世界研究の背景としてこれまで実証的な研究がほとんどなされてこなかったことを述べ(1節)、それを補うためにどのような手順を踏んでいくのかを示す(2節)。さらにその上で、筆者が行う研究手法の有効性とその妥当性の担保方法や、留意点など、具体的な調査研究の手法について論じる(3節)。

第1章では、霊的なものや超常的なものに対する説明の試みを霊性思想とし、近代日本におけるその流れを論じている。「精神世界」はその中で、現代になって形成されてきた1つの領域である。筆者は、その歴史的背景をスピリチュアリズムが流入した明治時代にまで遡って研究し、さらにそこから精神世界にいたる霊性思想の歴史を前期と後期に分けて、第2次世界大戦までを前期霊性思想、戦後を後期霊性思想とする(1節)。また、前期霊性思想の特徴として、催眠術ブームを経てその中心が心靈研究に向かっていったこと(2節)、後期霊性思想の特徴として、1970年代後半から「精神世界」が興隆してきたこととその背景について論じる(3節)。

第2章では、「精神世界」とは何かについて論じている。まず、「新霊性運動」という概念を用いて精神世界(及び世界の同様の現象)を明らかにしようとした先行研究を批判的に捉え返し、その限界を示すために精神世界の内部にいる人々への聞き取り及びアンケート調査を実施してその内容を分析する(1節)。また、本研究における研究対象を明確にするため、パワースポット巡りやタロットなどを単に消費するだけの人々を「広義の精神世界(関係者)」、パワースポットやタロットがどのような思想に基づいて行われているかを探求する人々を「狭義の精神世界(関係者)」とし、研究の対象を後者に絞り込む(2節)。さらに精神世界の実態を正確に掴むために、ブログやイーミックな資料によるドキュメント調査の中から狭義の精神世界に関するものを抽出し、聞き取り及び現地調査による具体的な事例を挙げて検証を行っている(3節)。

第3章では、精神世界の特徴をより正確に掴むため、宗教との比較を行っている。はじめに、先行研究やアンケート調査結果を参考にして本論文における宗教の概念を定め(1節)、次に精神世界関係者が考える宗教像を示した上で、「(旧来の新宗教を含む)伝統的宗教」及び「新新宗教」と「精神世界」とのそれぞれの関係について検証する。その結果、「精神世界と新新宗教にそれほど親和性がないこと」と、むしろ「精神世界と伝統的宗教とに親和性があること」を明らかにしている(2節)。

特記すべきことは、キリスト教の中でも精神世界と似た技法を持つカリスマ・ペンテコステ派に関しては反精神世界的であり、2節であげた宗教と精神世界の関係が、相互に親和性があるか相反するかのどちらかであったのに対し、この教派と精神世界との関係では精神世界から教派へ移動した人が複数確認されており、一方通行的な関係を見出すことができた点である。そこで、精神世界からこの教派へ移動した人々に対する聞き取り事例と、同教派の中にある霊的な問題を取り上げ、このような問題があっても彼らがなぜそこに留まり、精神世界に戻らなかったかについてさらに考察が必要であることを論じる(3節)。

第4章では、これまでの研究において精神世界の周辺とされてきた分野に関し、聞き取り及び現地調査によって詳細な検証を行っている。取り扱った分野は、心霊研究(1節)、霊体験(2節)、聖地(3節)、古神道(4節)、UFO・宇宙人(5節)、サブカルチャー(6節)、その他音楽療法等(7節)である。これらの具体的な事例を挙げた上で、精神世界に直接関わる人とそうでない人についての分析を行い、第3章3節で残された課題にも論及する。また、精神世界に直接関わる人の特徴について明らかにし、彼らの中から、相互に繋がり協働行為を行う人々が現れてきていることを示している(8節)。

第5章では、精神世界の内部で同じ目的のために集い、協働行為を行っている人々に注目し、その態様から「霊性にかんする協働組織」と名づけて、その特徴を分析する。まず、彼らを協働組織と見なすことの意味及びその概念についての説明を行う(序説)。調査対象としては、「一般社団法人たまや」(1節)、「大杉神社を守る会」(2節)、「NPO 法人心髄研究会 SEW」(3節)、「禊カフェ」(4節)、「レムリア会議」(5節)を取り上げる。彼らは聖地の整備や保守に従事し、精神世界技法を社会の中で積極的に生かして活動することにより、精神世界の根本的思想を社会の中で現実化することを目指している。筆者は、彼らが実際にどのような活動を行い地域社会とどのような関係を築いているかについて明らかにするために、継続的な現地調査と代表者及び会員への聞き取りを行い、NPO 法人心髄研究会 SEW に関してはさらに参与調査も実施した。主な調査項目は、「成立の経緯」、「活動拠点」、「世話人及び会員」、「活動内容」である。研究対象とした5つの組織のうち3つは神社を活動拠点にしていて古神道系の団体と混同されることがあるため、2つの古神道系団体を例にあげて「霊性にかんする協働組織」と何が違うか分析する。さらに、5つの協働組織についてその特徴を整理し、個人主義的な精神世界関係者と協働組織に属する精神世界関係者の違いについて検証する(6節)。

終章では、本研究において新しく確認された「精神世界と新新宗教に先行研究で言及されていた程の親和性がないこと」の理由について考察している。また、個人主義と言われてきた精神世界関係者の中に「霊性にかんする協働組織」に代表されるような協働性が芽生えてきた理由についても、「世話人」、「地域社会」、「SNSの普及」の観点から論じている。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、スピリチュアリティに関する先行研究を網羅した上で、それらの研究で共通理解とされていることが、必ずしも実証的に明らかにされていないことを問題視し、とくにスピリチュアリティの原点ともいえる精神世界に焦点を絞って、先行研究の知見を実証的に検証しようとした意欲的な研究である。

研究手法としては、延べ250人に及ぶ関係者への聞き取りや複数の団体に対して継続して数年かけて行なってきた現地調査といった質的研究と、9回に渡って実施したアンケート

ト調査やデータベースの分析などの量的研究を併用することで、分析内容の客観性を担保することに努めている。特筆すべきは、精神世界や新新宗教といった、聞き取りを実施する上で「共感」的に理解することが非常に困難であると予想されるフィールドにおいても、全く臆することなく挑戦している点であり、少なくともこの姿勢は先行研究を凌駕していると言わざるを得ない。

これらの実証的な研究の積み重ねの結果、これまでの研究では必ずしも明確ではなかった精神世界の現状がかなり詳細に明らかにされ、それらは先行研究の知見の見直しを迫るものとなった。とりわけ、従来の研究においてほぼ自明のものとされてきた感のある次の2点、すなわち、「精神世界と新新宗教には親和性がある」という点と、「精神世界関係者は個人主義的であり、奉仕による共同という理念を尊ばない」という点に関して、実際はそれとは逆の状況が見られることを指摘したことは、特筆すべき成果であると言える。

もちろん、本論文にも不十分な点がないわけではなく、論文審査を通じてさまざまな問題点が指摘された。それらのうち主なものを列挙すると以下のような点が指摘できよう。

- 1) 第1章で日本における霊性思想史を概観し、戦前と戦後の特徴を明らかにしているが、戦中については十分に論じられていない。
- 2) 第2章から4章にかけて、ニューエイジや宗教、類似の諸現象などと比較しながら精神世界の範囲を限定し、さらに精神世界に関しても広義と狭義に分けて、とりわけ狭義の精神世界を研究の主たる対象としている点はある程度評価できるが、「宗教」をどう見るかによって精神世界の捉え方も変わってくるので、読者によってはそれらの違いについて必ずしも説得力があるものとなっていない。
- 3) 第5章では、「霊性にかんする協働組織」に焦点化することで、先行研究との差別化を図っているが、「協働」の捉え方がそれほど明確ではない。地域社会との関係についても、ここで取り上げられているように良好な関係を築けていないものも扱うべきだった。
- 4) 「伝統的宗教との親和性」に関しても、取り上げた事例から普遍化することができるか疑問が残り、結論の一般化に性急すぎるきらいがある。
- 5) 終章で SNS の普及と協働組織の興隆を関連付けているが、必ずしもその関連性について明確になっていない。
- 6) 多くの事例が集められているが、かえってそれが論文を複雑で分かりにくくしている面もある。理解のためのモデルを作るためには、むしろ事例を絞った方が良かったかもしれない。

以上のようにいくつかの問題点を指摘できるとはいえ、豊富な事例に基づいた実証的研究は先行研究の見直しを迫る上で説得力に満ちている。関連する諸分野の研究に対しても大きな刺激を与えるものとなることが予想され、学術的にも大いに意義を有するものであって、総合的に見れば本論文の内容が博士論文の水準を十分満たしていることは疑いえない。よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。